



グループ名:

**Bonsai
Habana**

創立:
2001年

代表者:
ホルヘ・ルイス・ゲラ・
ペンサド

活動内容:
盆栽の指導と栽培

ホルヘ・ルイス・ゲラ・ペンサドさんへのインタビュー

「Bonsai Habana」は、2001年にホルヘ・ルイス・ゲラ・ペンサドさんらによって設立された、盆栽の指導や展覧会を開催しているグループです。盆栽は、中国を起源とする日本の伝統芸術で、自然を小さなスケールで再現するものです。日本での伝統は1300年以上前に遡ります。盆栽とは、その字のとおりお盆や鉢の中に自然を育てることを意味しています。

盆栽との出会い

「盆栽との初めての出会いは、近所の人が持ってきた盆栽が描かれた小さな切手でした。」当時7歳だったゲラさんは、祖母の勧めで切手の収集をしていましたが、「その切手に心を奪われました。」と当時を振り返ります。時は経ち、盆栽との最初の出会いから約40年後、ゲラさんが46歳のとき、西洋の盆栽のバイブルと呼ばれるジョン・ヨシオ・ナカ*の『盆栽技法』の第1巻を友人に見せてもらいました。ゲラさんは、269ページにも及ぶその分厚い本を貸してくれと頼み、リビングのソファから立ち上がることなく、そして一睡もせず読み終え、興奮したまま仕事に向かったと言います。1997年のことでした。

ゲラさんにとって盆栽とは何ですか、と聞くと、「盆栽は「魔法」のようなものだと思います。私の性格と、自然への愛情から、盆栽という芸術に人生を捧げずにはいられません。盆栽に触れているときは、自分の精神的な静けさを自分の中に感じることができます。」と答えました。ゲラさんの人の深みを感じる言葉です。

「Bonsai Habana」について

友人から借りた本『盆栽技法』をきっかけに、ゲラさんは同じように盆栽に興味を持つ人と出会い、その知識と情熱を共有し始めました。2000年の始め頃、ハバナ旧市街にある博物館「アジアの家」でビデオや実践形式を用いて、12回のコースで様々な盆栽の手法を学べる盆栽講座を開始しました。「仲間が集まると自信がつき、自分の情熱や知識をもっと多くの人に伝えたい、という冒険心から始めました」と笑います。「驚いたことに、これらの活動はハバナ歴史事務所の前所長であった故エウセビオ・レアル氏にも認められ、装飾美術館で継続的に活動を続けることができるようになりました。」こうして、2001年に「Bonsai Habana」が設立されたのです。

これまで何名くらいのかたが受講したのですか、と聞くと「1000名以上の方が、私のコースを受けました。」



*ジョン・ヨシオ・ナカ（1914-2004）は、日本人の祖父の影響で盆栽を学んだ日系アメリカ人。盆栽の本を書き、西洋にこの芸術を広めることに生涯を捧げた。盆栽の巨匠の一人と言われ、1985年に、天皇陛下より勲五等双光旭日章（当時）を授与された。

シエゴ・デ・アビラ、オルギン、サンティアゴ・デ・クーバなどの地方都市でも、私の弟子が盆栽を広げてくれています。」と懐かし気に答えました。新型コロナウイルスの影響で講座はまだ再開できていませんが、「Bonsai Habana」の24名の正会員は、日々盆栽を育てています。人数だけを聞くと小さく思えますが、新型コロナウイルスや国内の厳しい経済事情、また盆栽は生きて成長する芸術で手入れ・深い愛情・根気を必要とすることを考えると、決して少ない会員数ではないのです。



Bonsai Habanaの盆栽は国営テレビに3年間使用されていました

「すべての人が根気と時間の余裕を持っているわけではありません。けれど、今の若い世代の方には、携帯電話を操作するだけではなく、時間を見つけて自然に親しんでほしい。」とゲラさんは願っています。

キューバから世界へ

今日、盆栽は世界のすべての大陸で親しまれています。自然の持つ普遍的な美しさと、異なる樹種を取り入れることができることが、盆栽の大きな魅力です。ゲラさんがキューバのあらゆる種類の樹木を研究するという冒険をしたおかげで、2016年に「Bonsai Habana」はラテンアメリカ・カリブ海盆栽連盟（FELAB）の会員になりました。

当時のFELAB会長ペドロ・モラレス氏にインタビューをすると、「いくつかの地元樹木、特にクアビージャ（学名Suriana Maritima）の作品に感銘を受けました。」とゲラさんの技術を誉め、「彼らの少ない経験値や情報量とは裏腹に、彼らの作品は素晴らしかったです。」と続けました。



ペドロ・モラレス氏とホルヘ・ゲラさん（2016）

“

「盆栽が何世代にもわたって親しまれるよう、新しい世代を教育することが私の仕事だと思っています。」



装飾美術館における盆栽の展示会

ゲラさんにクアビージャについて聞くと、「コヒマルで見つけたクアビージャは、私たちが国際的に認められるための扉を開いてくれました。手間がかかりますが、魅力的な木です。」と愛情いっぱいに答えました。ゲラさんもペドロ氏も、中南米・カリブ地域はアジア諸国に比べて経験に欠けるけれど、トロピカル地域の樹木を扱う盆栽技術の発展は、盆栽界に貢献できるとの認識を共有しています。

日本大使館との最近の関係では、2018年の日本人キューバ移住120周年記念のハバナ国際図書展における盆栽の展覧会、またキューバ日本文化芸術研究会での講義があげられます。「Bonsai Habana」は「日本だけでなく、インドネシア、イギリス、オランダ等にも認められており、中国で行われている国際盆栽展には、キューバ代表として2回招待されました。」と教えてくれました。

ゲラさんの世界観・将来の夢

ゲラさんは今後、盆栽とどのように関わっていきたいですかという将来の展望に対する質問に、「現在中断されている盆栽の講座をまた始めたいです。盆栽は生きた芸術です。手入れは必要ですが、逆にしっかり手入れすれば、300年、400年と生き続けることができます。盆栽が何世代にもわたって親しまれるよう、新しい世代を教育することが私の仕事だと思っています。」と力強く答えました。ゲラさんはいつも生徒たちに、どの木にも魂が宿っていること、私たちが専念すれば、それを目覚めさせることを話しているといいます。



*古渡りの盆栽鉢に植えられたクアビージャの木

厳しいキューバの現状についてコメントすると、「私たちはどんな困難な状況にいても、目標は達成できると学びました。盆栽でもそうです。」と何でもないように言いました。「盆栽の中にはもちろん、鳥肌が立つほど完璧な作品もたくさんあります。でも私は盆栽を自然な形に保つことを心がけています。なぜなら、植物だけではなく、私たち人間も、余裕を持つことによって成長できると考えているからです。確かに今のキューバは物資不足も深刻で厳しい状況に変わりはありませんが、皆が少しの余裕を持つことで、人生に笑いが生まれるといいなと思います。盆栽も一緒です。自然体を保つことで、そこに余裕が生まれ、小さいながらも豊かに育つのです。」と哲学的な一面を見せました。



最後にゲラさんの夢について聞くと、「盆栽界の巨匠、鈴木伸二氏がキューバにやってきて、実際にお会いすることです。」と笑いました。ゲラさんの盆栽にける献身と愛情があれば、鈴木氏に会う日、またゲラさんが日本を訪れる日も、いつか訪れるのではないのでしょうか。



スリナムゴウカン (Calliandra Surinamensis)



「森林」